

日教組の教研全国集会の技術・職業教育分科会の様子

(中学校関係)

佐々木 享

1999年の日教組の第48次教研全国集会の技術・職業教育分科会は1月22日から24日までの3日間、岡山で開催された。第1日は中学校高校の合同で、第2、3日は分かれて討議された。ここでは、中学校関係について、筆者の感想を中心に報告する。

報告書を分野別にみると、電気3、金属加工4、機械2、情報基礎4、栽培2、その他となる。栽培が意外に多く、木材加工は皆無だった。主題が何であれ、環境問題に対する関心の高いことは、かなり共通していたといえる。ただし、先行研究が少ないためか、生産技術の観点に立脚した環境問題のとりえ方は弱かったように思われる。

木材加工関係のレポートはなかった。しかし司会者団の配慮で行なわれた岡山のサークル「削ろう会」の教師たちによるやり鉋などの実演は、好評だったように思われた。

中高合同で討議した際に、高校教育課程改革の中に盛り込まれている「就業体験(インターンシップ)」に注目すべきだと筆者が述べたことと関連する討議の中で、進路指導の一環として学外実習を実施している中学校は多い事実が明るみにでた。技教研で話題になったことはなかったように思うので、筆者には意外だった。

情報基礎関連の報告書は4件で、その3件までがホームページを作成したというもの。報告者は得意になっているようであったから、参加者から支持されるのかと思っていたところ、討論では、それは技術科の内容といえるのか、美術科ならばもっときれいに作れるのではないか、というような意見が続き、意外な程に支持はなかった。

栽培の討論では、無農業をめざす実践の一環として、木酢の役割がひとしきり話題になった。私は知らなかったけれども、この木酢は、最近話題になっているらしい。

傍聴者(技教研会員の赤沢さん)から、通知表では技術・家庭科の成績を技術科と家庭科とで別個に扱っているという事例が紹介された。そこで参会者の学校の実態を挙手で調査したところ、参加者約30人の約3分の1の学校で同様の扱いをしていることが判明した。これは、技術科と家庭科とは独立した教科であるという考え方が、現場には予想以上に広く浸透していることを示唆しているといえる。

官制研究会の影響なのか、紋切型の表現は相変わらず多かった。そうした中で、電気領域の報告書に「創意工夫をさせた」とあるがどんなことをさせた(した)のか、という疑問を提起した人がいた。そしてこれに対する回答につき、それは電気についての創意工夫ではなく、加工工程の工夫ではないか、論点を曖昧にすべきではない、という鋭い指摘があったことは印象的だった。

告示以前に報告書が書かれたためか、改訂学習指導要領そのものは正面切った話題にはならなかった。ただ、最終日に感想を述べ合う中で、この度創設された「総合的な学習の時間」の扱いに関連して、可能なら技術科は積極的に乗り出すべきだという意見には反対だ、かつて新設された学校裁量の時間がいつのまにかうやむやにされた経過を考えると、技術科が「総合的な学習の時間」を活用することは技術科消滅に道を開く可能性があるからだ、という意見があったことを紹介しておく。(常任委員、愛知大学短期大学部)